

精神分析学における自他関係論

教育学コース 須川 公央
教育学コース 波多野 名奈
教育学コース 野見 収
教育学コース 秋山 茂幸

An Approach to the Theory of Relationships between "Self" and "Other" in Psychoanalysis.

Kimihiko SUKAWA, Nana HATANNO, Osamu NOMI, Shigeeyuki AKIYAMA

In recent years, problems about relationships between "Self" and "Other" have been discussed much in the educational theory. In order to find a clue to these problems, we take up some psychoanalytical theories, especially Melanie Klein (1882-1960), Donald Woods Winnicott (1896-1971), Heinz Kohut (1913-1981) and the father of psychoanalysis, Sigmund Freud (1856-1939). This study examines a lot of problems in the theories of relationships between them from the psychoanalytic point of view, and will provide some perspectives for the discussion on this theme.

目次

—フロイトの発生論が内包する“ねじれ”について—
秋山 茂幸

はじめに

A. 深層=始源における無分節
—“そもそものはじまり”における<一つのもの>—

I M.クラインと自他の弁証法

—抑うつ的態勢と鏡像段階— 須川 公央

A. 妄想-分裂的態勢と投影同一化

B. 抑うつ的態勢と鏡像段階

C. 愛, 罪そして償い

B. 強迫的かつ神経症的な回帰願望

—“いまここ”で振り返ることの“ねじれ”

C. 終わりに

II 自他境界としての「自我」

—D. W.ウイニコットの母子関係論において—

波多野 名奈

A. 母親のはたらきかけ —マザリング(mothering)—

B. 自我の原初的形態 —身体自我(body-ego)—

C. 境界膜としての自我 —自他のお出会う場所—

おわりに

はじめに

秋山 茂幸, 野見 収

III H.コフトにおける自他関係観

—「ナルシズム」の観点から— 野見 収

A. フロイトにおける「ナルシズム」論とその自他関係観

B. 精神分析学におけるその後の展開

C. コフトにおける「ナルシズム」論とその自他関係観

D. 自他関係論の可能性を求めて

教育学はこれまで、<教師と生徒>、<親と子>、<大人と子ども>といった所謂<教育関係>の問題をその中心的課題の一つとしながら、各種議論を展開してきた。そこでは、これら諸関係における対立の止揚、すなわち教育主体の指導という関わりの中で、いかにして教育客体を学習主体として成立せしめるかが問題になっていたと言って良い。しかし、このことは、I. カントにおける「私はどのようにして強制において自由を教化するのか?」[Kant 1803=1966:31]という問いが象徴しているように、それ自体、潜在的な論理矛

IV 私と他なるものの“そもそものはじまり”とそれを“いまここ”で振り返ること

盾を孕むものである。つまり<教育関係>への問いとは、教育学における一種のアポリアとして見なさざるを得ない事柄なのである。

そしてポスト・コロニアリズムの思潮に代表される、「他者」論の近年における隆盛は、この<教育関係>をめぐるアポリアの輪郭をより明確なものとするに寄与した。すなわち、教育は教える者の教育意図が学習者の反応に反映されること、言い換えれば、学習者を同化可能なものとみなすことをもって成り立つのだが、しかし、教育を成り立たせようとする、学習者の「他者性」は無視され抑圧されてしまうという形で<教育関係>のアポリアが描き出されるのである。

このように、教育における「他者」という視点は、<教育関係>をめぐる問題性を明確化するとともに、哲学・思想史上の議論の流れと接続しながら、それがより広く<自他関係>の問いに対しても開かれていることを示している。まさに<教育関係>の問題は、他の学問領域との相互交流の中で把握されるべき可能性をもった事柄なのである。

そうしたことから、ひとたび、今日いたるところで引用・参照される現代思想の諸理論に目を向けたとき、<自他関係>の問いを、形成や発達などといった教育学と近接する問題構成の中で、その議論を展開していった思潮の一つとして、精神分析学が挙げられることに気づくであろう。とは言え、精神分析学において<自他関係>というとき、そのすべては曖昧模糊としているように思える。まず<自>とは一体何を指すのか。自我、自己、自分、私、主体などといった日本語、さらにここに英独仏の語彙を加え薄く切り分けていくと、無数の<自>が現れてくる。また、<他>については、<自>(もしくは<自>成立以前の)の身体の一部、<自>自身(の無意識・エス)、<自>の鏡像、そして母(の身体の一部)、(象徴的な)父、さらには外的世界一般など、様々な位相で語られる。それを踏まえて、<関係>なる言葉については、例えば以下のような問いが導出されてくるだろう。すなわち、<自>と<他>は互いに静的、恒常的なものであってそれらが<関係>を取り結ぶのか、それとも<関係>を取り結ぶ中で、はじめて<自>と<他>が構造化されてくるのか。<自>と<他>という二元的な腑分けは本当に可能なのか。<自>と<他>なるものは、<関係>をこそ表わす名称なのではないか。そもそも、特に精神分析学において<関係>とは何を意味するのか、など。そこには、そういった理論的な様々な問いとともに、<自他関係>論に特有のいわばメタ理論的な問題も含

み込まれている。すなわち、その<自他関係>論は誰から見た話なのか(観察者の位置)、誰がそれを語っているのか(語りの主体)などの問題である。

これら多種多様な問いの各層を、一旦ゆるやかに、「精神分析学における自他関係論」の名の下に収束させ検討を行なうことで、今後捉えるべき<教育関係>をめぐる課題の端緒を掴んでおく、これが本稿のねらいである。その意味で本稿は、今日の教育学的課題に視線を送りながら、しかしそこから幾歩か退き下がったところで問題を吟味し、その議論を展開しようとする、いわば基礎的かつ初歩的研究として自らを位置付けている。

ところで、フロイト以後の精神分析学の流れは、図式的に言うならば英国と米国において二大潮流を形成し、それぞれ対象関係論、自我心理学として花開いた。本稿では、精神分析学の祖 S.フロイト(Sigmund Freud 1856-1939)(秋山)、英国対象関係論の源流である M.クライン(Melanie Klein 1882-1960)(須川)、クラインを批判的に継承した対象関係論の代表的存在である D. W.ウィニコット(Donald. W. Winnicott 1896-1971)(波多野)、自我心理学を批判しつつ新たに自己心理学を打ち立てた H.コフート(Heinz Kohut 1913-1981)(野見)を取り上げている。各々の人物は、先行世代と対立し乗り越えていく一方で、根源的な問いを共有しつつ自らの思想を展開している。また、英米二つの潮流は、近年では相互に影響を受け合いつつ、新たな統合の道を模索しようとする動きも見られる[小此木 2002]。本稿の各論は、精神分析学内部での流派の対立にとらわれることなく、<自他関係>論に関する各人物のテキストに寄り添いながら、その読解を比較的自由に行っている。

I章の須川論文は、クラインにおける<自>の立ち上がり(自我の凝集化・構造化)の仕方を母親なる<他>との弁証法から解読している。そこでは、クラインの理論を継承した J.ラカンの議論を参照しながら、抑うつ的態勢と鏡像段階論の噛み合わせが試みられる。そしてそれによって逆に、難解なラカンの理論の一側面がより広い文脈に位置付け直されることにもなっている。II章の波多野論文では、より具体的な母子関係論の相のもとに、<自他>が分かれてくるプロセスを追いながら<自他関係>を可能にする前提条件の考察を展開している。そこでは、ウィニコットの「自我(ego)」の捉え方の特有性を浮き彫りにすることで、<自他>という問題系が両者を繋ぎつつ切り離すというパラドックス全体を包含するものであることが明らか

かにされるだろう。Ⅲ章の野見論文は、〈自他〉の分節か未分節かという二者択一の土俵を宙吊りにしつつ、従来の発達の見方に揺さ振りかけられる。それを可能にしているのが、コフト独自のナルシズムの発達という見方であり、さらには〈自他関係〉論を分析する視座を主観的位相と客観的位相に腑分けするという独自の分析枠組みである。Ⅳ章の秋山論文では、他の三論考とは異なり、内なる〈他〉の問題を考察している。そこでは、フロイトの「自我=私」と「エス=それ」の発生論的關係を分析し、それを遡及的に語ることに内包する“ねじれ”，矛盾に着目することで、〈自他関係〉論のメタ理論的、論理構造的の問題が明らかにされる。

各論の検討を通じて浮き彫りになってくるのは、〈自他関係〉論を展開するということが、上述したような問いの地平をいったん突き崩しつつ再構築するという絶え間ない作業の継続に他ならないということである。各論者は、問題設定の仕方、分析視角の方向性などにおいて、ある場所では重なり交叉し合いながらも、それぞれの理論の中で独自の地平において考察を行っている。したがって各論は、〈自他関係〉論という縦糸で貫かれながらも、基本的にはそれぞれ独立した論文として読まれることを期待するものである。

I M.クラインと自他の弁証法

—抑うつ的態勢と鏡像段階—

須川 公央

M.クラインによれば、乳児は生の初めから対象を志向しており、その対象との間において活発な対象関係を営んでいるとされる。かつて、J.ラカンはクラインを評する件において、乳児はその最早期においてさえ、もう既に対象関係の弁証法的運動の内部に組み込まれていると指摘したが[Lacan 1958=1981:43]、それはクラインが明らかにしたように、誕生時から自己内部に備わっているとされる「自我(ego)」が、死の本能と生の本能のせめぎ合いの中で、自己の生存を賭けた飽くなき闘いを対象(母親)との間で繰り広げているからに他ならない。

以下、小論ではそうしたクラインにおける自他関係の弁証法的展開を、ラカンの議論を導きの糸としながら、発達の時系列に沿いつつ概観していくことにしよう。

A. 妄想-分裂的態勢と投影同一化

クラインによれば、発達の最早期における乳児の対象関係は「無意識的幻想(unconscious phantasy)」をその舞台として展開されるという。クラインの理論的協力者であったS.アイザックスはそれを「本能の心的表現」[Isaacs 1948=2003:121]と定義するが、その内容は極めてサディスティック且つパラノイアックである。例えば、口唇期に起源を持つ本能(instinct)が、心的な幻想内容に変換されて対象に投影されるとき、その幻想内容は「母親の身体の中にある良い内容を吸いつくし、噛み砕き、えぐり、奪い取る」[Klein 1946:8=1985:11]といったカニバリスティックな表現をとるとされる。また同様に、肛門期的本能に端を発する幻想内容であれば、それは「排泄物を自分のなかから追い出し、母親の中へと追いや」[ibid 12]るといった形で表現されることになる。

クラインはこうした破壊性を帯びた対象関係の早期段階を「妄想-分裂的態勢(paranoid-schizoid position)」と名付けたが、この時期における乳児の主観的な対象世界は、良きものと悪きものが入り混じって交互に乱れ交う玉石混淆の世界、混沌の世界そのものである。

ところで、この妄想-分裂的態勢における乳児の対象とは、まずもって母親の「乳房(breast)」である。クラインはこの時期における対象関係は、初めは「部分対象(part objects)」——それらは乳房を初めとする各身体器官、そして糞便、尿といった自己内部に存在する悪い(良い)対象を指す——との関係において生起すると述べたが、乳児は、この部分対象としての母親の乳房に対する葛藤を「良い乳房(good breast)／悪い乳房(bad breast)」として体験するという。

まず、乳児の原初的な対象である母親の乳房は、乳児の空腹を満たしてくれる限りで乳児自身の中に取り入れられ、内的対象として定着する。クラインはこれを「良い乳房(good breast)」と呼ぶが、この内在化された良い乳房は自我(ego)を支えつつ、自我もこれを理想化するという限りで、自我との間にリビドーを媒介とした循環構造を形成する。新宮によれば、この状態は「いわば絶対善であり、認識すべき何の対象も存在しないという点で、子どもはいわば即自の状態」[新宮 1989:32]にあるとされる。

しかし、この乳児の即自的世界はいずれは破綻を来すことになる。というのも、母親の乳房は、乳児の欲望を常に満たすとは限らないからである。具体的には、乳児が空腹であるにもかかわらず、そばに乳房が見当たらないときなどを想起してもらえればよい。この場

合、乳児は空腹のために死の本能の一表現形態である「攻撃衝動(destructive instinct)」を乳房へと向けてそれを攻撃するという。ところがこうした行為は逆に、乳児の内部に「悪い乳房(bad breast)」という内的対象を形成することにより、自我はその内側から脅かされることになる。つまりそれは、自らが乳房に向けて放った攻撃衝動が反転することによって生じる報復感、迫害感の所為である。こうして良い乳房を媒介とした先の良き循環は、自己を脅かす悪い乳房によって切れ目が入られることになる。そして今度は「もとの自分としてのあの循環を外から見る機会を与えられ、彼はいわば対自となって」[ibid.]、対象関係の弁証法的運動の中に投げ出されることになるのである。

さて、自らが発した攻撃衝動によって、いまや対的存在となった乳児は、＜快—不快＞原則に従うことにより、今度はこの内在化された悪い乳房との間で格闘を繰り広げることになる。乳児はありとあらゆる手段を用いて悪い乳房を攻撃し排除しようとする。乳首を噛んで唾を吐くといった口唇期的行為に始まり、排尿、排便するといった尿道期的・肛門期的行為に至るまで、それは外的な乳房が自らの悪しき内容物によって満たされ、乳房そのものを自らの支配下に置くことができるようになるまで続く。クラインは、無意識的幻想を基礎とするこうした対象の破壊と全能的支配に特徴づけられた心の働きを「投影同一化(projective identification)」という言葉によって表現するが、つまりそれは乳児の幻想的全能感によって為される対象の魔術的コントロールの謂である。

ところで、クラインによればこの投影同一化は、それが正常に機能する限りでは他者に対する共感能力の基礎を担う機制であるとされるが¹⁾、その働きが過度に機能してしまう場合、それは自らの存立それ自体までも脅かすものとして作用してしまうという。いま見てきたように、投影同一化によって悪い乳房を初めとする「悪い対象(bad objects)」は母親へと投影(project)されるわけであるが、そうすると今度は逆に、自己の内側からではなく外側から迫害されているように乳児には感じられてしまう。その為、乳児はこれまで以上に内的な悪い対象を乳房へと投影してそれを攻撃すると同時に、外から攻撃を仕掛けてくる外的な乳房を完全に自らの支配下に置くために、自我の分裂排除した部分を投影してそれを支配しようとする。ところがこうした過度な投影同一化によって、自己の内部は枯渇化し、自我の働きは脆弱となるため、終いに乳児は自らが解体され、その身体はバラバラになったよ

うに感じられるというのである。

こうして終わりを迎えることのない悪しき循環は、その弁証法的運動を支えるに必要な自我(ego)までも失わせることによってそれを破綻に導くことになる。過度な(eccessive)な投影同一化と、その結果としての自己の崩壊。その帰結が示すところは極めて破滅的だと言えよう。

B. 抑うつ的態勢と鏡像段階

母親によるマザリングが十分に機能し、乳児の内部に良い乳房を初めとする「良い対象(good objects)」がしっかりと定着して自我がその凝集性を増してくると、乳児の舞台は妄想-分裂的態勢から次の段階、「抑うつ的態勢(depressive position)」へと移ることになる²⁾。良い対象を媒介とする良き循環が、悪しき循環を被覆すること、これが抑うつ的態勢への移行を可能にする条件である。

ところで、この抑うつ的態勢における特徴として重要なのは、乳児の関係する対象がもはや部分対象ではなく「全体対象(whole object)」という点にある。これまで見てきたように、妄想-分裂的態勢の時期にある乳児は、母親を部分対象(例えば、乳房、口、手など)としてしか認識できず、それら部分対象が母親という一つの全体対象に帰属しているという事実気付くことが出来ない。ところが乳児は、この抑うつ的態勢に至って外的・内的世界に対する認識が増してくるにつれ、それら部分対象が実は一個のまとまりを持った全体対象(全体像としての母親)であるという事実気付くのである。と同時に、先の妄想-分裂的態勢においてバラバラにされ、解体されてしまった乳児の身体も、この全体対象としての母親の形姿をいわば鏡として一挙に纏めあげられることになる。

ラカンは、この統一性を欠いてバラバラになってしまった乳児の身体イメージを「寸断された身体(corps morcelé)」と呼び、それら寸断されバラバラになってしまった部分対象群が一つのまとまりを持った統一像として仕立てあげられていくさまを、独自の「鏡像段階論(Le stade du miroir)」として定式化した³⁾が、以下ではこのラカンの鏡像段階論を議論の伏線としつつ、論を追っていくことにしよう³⁾。というのも、それは先に破綻した自他の弁証法に新たな展開をもたらす契機ともなるからである。

ラカンによれば、「鏡像段階というのは、精神分析がこの用語に与える全き意味での同一化のひとつ」[Lacan 1949=1972:126]であり、それは「まだ口のき

けない状態にある小さな子どもが、自分の鏡像を小躍りしながらそれとして引き受け」[ibid.]つつ、自らの身体の全体像を想像的に獲得する段階であるという。乳児は、鏡像——この鏡像は、全体対象としての他者(母親など)の形姿と言い換えても良い——のうちに、自らの身体の統一像を予感することによって、分裂し寸断された身体を一個のまとまった形態のゲシュタルトとして仕立てあげる。と同時に、ラカンによれば「このゲシュタルトは、わたしの精神的恒常性を象徴すると同時に、後に自己疎外する運命をも予告するもの」[Lacan 1949=1972:127]であるとされるように、それは乳児を新たな弁証法的関係の中に誘い込むことにもなる。

というのも、乳児は鏡に映った自己像をはじめは自身のものとして受け入れない。それは徹頭徹尾、外から来た他者のイメージである。しかし時が経つにつれ、乳児はこの鏡像(他者)が自分自身の姿を表しているものとして受け入れるようになる。こうして乳児は、この完全で統一的な鏡像(他者)に想像的に同一化することによって、自らの身体の不完全さを覆い隠し、寸断された身体を統一的に纏めあげることに成功する。しかしこの鏡像(他者)は、もとはと言えば自己の外部から来た他なるものにすぎないのであって、乳児は自己をこの他なるものとしての鏡像(他者)に還元し、それに自らを疎外するという形でしか自己同一性の保証にありつけない。従って、乳児はいわば鏡像(他者)の囿となって、鏡像(他者)に自己の存在の確からしさを見いだし続けると同時に、それが乳児をして、常に鏡像(他者)との間の断絶を自覚させてしまうことになる。つまりこの鏡像段階とは、自らの存在の確からしさを保証するアルキメデスの点として乳児に自立性を付与すると同時に、逆にそれは、鏡像(他者)への囚われという事態を引き起こすことによって、乳児を他律的な存在へと追い込んでしまうという逆説的な結果をもたらすものなのである。

再びクラインの議論に戻ることにしよう。全体対象としての母親とは、まさに解体不安に苛まされていた乳児に対し、身体の全体像を提供する鏡像として機能することにより、環界における自立的な存在としての歩みの第一歩を保証すると同時に、乳児はその自己性を母親という外部にしか見いだせないが為に、母親への疎外という体験を通してしかその保証にありつけない。つまり乳児は、自らの生を主体的に確立するにあたって、母親という外部の他者においてでしか自身を体験できないという自家撞着を自らの内に抱え込むこ

とになるのである。それは同時に、自らの思い通りに欲望の母親を支配することのできた——もちろんこの全能的な対象支配の試みも結果的には破綻したわけではあるが——かつての妄想-分裂的態勢との完全な訣別を乳児に要請することになる。

これまで見てきたように、乳児は妄想-分裂的態勢において悪い乳房との間で自らの生死を賭けた闘いを行った。乳児は、悪い乳房に対して自らを自立的存在として規定し振る舞うことによって、良い乳房を自身の所有物としようとしたのである。ところが、自らの欲望を満足させようと悪い乳房を攻撃し破壊することは、この抑うつ態勢にあっては同時に良い乳房をも破壊することになってしまう。何故ならば、抑うつ態勢に至って母親を全体対象として認識するということは、良い乳房と悪い乳房の双方が母親という一個の独立した存在に帰属しているという事実を認識することでもあるからである。クラインは言う。「母親の愛される側面と憎まれる側面は、もはやそれほどかけ離れて分離したものと感じられなくなるが、その結果喪失への恐怖が増大し、悲哀(mourning)にも似た状態になり、強い罪悪感が生じる。何故ならば攻撃的衝動が直接愛の対象へと向かうように感じられるからである。」[Klein 1946:14=1985:19]。悪い乳房を攻撃しそれを破壊するということが、それは同時に良い乳房を破壊するということでもあり、その行為が最終的にもたらすのは、自らの存在の確からしさを支えるに必要な鏡像としての母親の喪失という決定的な事態なのである。

こうして見てくると、乳児は母親との間におけるかつての相克的な弁証法的関係を清算する必要に迫られよう。自己の生存をかけて母親とせめぎ合った以前の相克的な関係は、逆に自らの生を切り崩していくことになるからである。自らを主体的に立ち上げていくためには、母親という外部の他者なしには不可能であるという矛盾を抱えつつそれを乗り越えていく、それはクラインが「償い(reparation)」と名付けた母親との新たな関係構築の場面へと乳児が参入することによって達成されることになるのである。

C. 愛、罪そして償い

悪い乳房を攻撃することが、結果的に良い乳房をも破壊することになってしまう、かつてメルロ=ポンティはクラインの理論を援用するある一節において、乳児が抱くこの両価的な感情を「両極性(ambivalence)」という言葉で表現したが⁴⁾、いまや乳児はこの両極性に

どう対処しそれを克服するかがこの抑うつ的態勢における焦眉の課題となる。

「愛、罪そして償い」(1937)という論文において、クラインはこうした「良い(good)」と「悪い(bad)」という両価的な感情の狭間で揺れ動く乳児が、自らの攻撃衝動と貪欲さ(greed)のために傷つき破壊されしまった母親に対して、それを修復し再建しようとする「償い(reparation)」の衝動が発現すると記載している。「償い(reparation)をしたいという願望は、愛する人への関心とその死に対する恐れと密接に結びついているので、今や創造的、建設的な形で現れてくるのである」[Klein 1937:336=1983:113]。クラインによれば、償いとは自らが母親に対して犯してしまった罪に対しての贖いの感情の現れである。そしてその償いの具体的なあらわれを、クラインは次のような子どもの仕草に見て取る。「攻撃衝動が絶頂にある時、子どもは紙・マッチ・小さな玩具などあらゆるものを、引き裂いたり・切り裂いたり・壊したり・濡らしたり・燃やしたりすることに決して飽きることはなく、またこの破壊への熱中が、不安の襲来や罪悪感と交互に起きる。しかし、分析経過中に不安が徐々に減少するにつれて、その子の建設的傾向が全面に出始めてくる。例えば、以前は木片を切り刻んでばかりいた少年の場合、彼は今やこれらの木片から鉛筆を作り始めることになるであろう。」[Klein 1933:255=1983:11]。

乳児は、母親をいわば別の象徴等価物に見立てて、傷ついてバラバラになってしまった母親の再建に取り組む。木片を切り刻むという行為は、かつての破壊的行為を自らの行為として認めつつあるということであり、木片から鉛筆を作り出すという行為は、そうした破壊的行為によって失われてしまった母親を再創造するということである。つまりそれは、(破壊的行為の結果としての)母親の不在(喪失)という事態を、(創造的行為の結果としての)母親の在に変えることによって、母親の不在に耐えうる能力を乳児が獲得しつつあるということであり、とりもなおさずそれは母親の不在という事態によって、哀しみや罪責感を受動的に被らざるおえなかった乳児が、そうした償いを行うことによって、母親の<在—不在>という状況そのものを能動的に支配するような、より上位の精神構造を獲得しつつあるといえよう。

ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法にも似たかつての不毛な母と子の弁証法的関係は、乳児自身が自らの始原の暴力を、償いという創造的行為へと昇華することによって、ここに一応の結末を見ることになる。「自己」

は「他者」なしには存在できない。にもかかわらず「自己」は「他者」に対して自らの主人性を主張すればするほど「他者」の他者性は失われ、「自己」は自らの存在の足場としての「他者」までをも失ってしまうという「自己」と「他者」の相克性をめぐる根源的な問い。本論はそうした「自己」と「他者」の主人性をめぐって繰り返られる弁証法的な自他関係一般の起源とその始原の風景を、早期母子関係にまで遡って示してみただけに過ぎない。

II 自他境界としての「自我」

—D. W. ウィニコットの母子関係論において— 波多野 名奈

クラインを理論的祖とする英国対象関係論を継承しそれを乗り越える形で発展させたとされる、精神分析第三世代のD.W.ウィニコットであるが、自他関係という点においてはクラインに倣う仕方で、その基盤を最早期の母子関係のなかにみている。そこには、如何なる人間にとっても最初の「他者」である母親との関係が、その後の「他者」とのあらゆる関係の土台となるという前提がある。しかし、「他者」との関係という意味での「対象関係」⁵⁾が、出生直後から何らかの形で開始されていると考えたクラインの理論に対しては、ウィニコットは満足しなかった。彼は、人間は最初から「自我」をもった存在として生れ落ち、出生と同時に「対象」たる「他」との関係に参入するというクラインの主張を一方で支持しながら、その関係「以前」を理論に組み込もうとした。それは、客観的実証的にはその存在を証明できない自他未分離の位相を、自他分離以前に仮説的に想定する立場の表明である。言い換えれば、「対象関係」成立以前における人間の原初的様相に対する注目と、それを人間の成熟に最重要とみる姿勢である。したがって、ウィニコットの関心は、「対象関係=自他関係」が成立するに至る過程、つまりは「対象関係」を可能にするその条件に向けられることになる。結論を先取りする形で述べるならば、その条件とは「自我」の確立であるということになる。そして、その過程を追うなかで、ウィニコットが語る「自我」が、クラインが想定していた自他関係における「自」を代表するものとしての「自我」と、重なりつつも決定的に離れて行く様相が明らかになるだろう。

A. 母親のはたらきかけ —マザリング(mothering)— ウィニコットによれば、人生の最早期における人間

は、未だ自他が分離していない混沌とした世界に生きているという。そこは「何事も自分でないもの(not-me)として分別されていない、したがって「自分(ME)」もまたできていない、という、風変わりな場所」[Winnicott 1965b:17=1984:20]である。ここで乳児は、あらゆるものが自らの思いのままになる全能性を保証され、自己完結的で孤独な一者性の世界を享受しているのであるが、次第にそれを喪失し、自身の支配の及ばない外的世界に侵食されていく。その喪失に必然的に伴う外傷を最小限に止め、なおかつ外的世界との出会いを促進するのが、母親の役割である。母親は乳児の空腹を満たし、清潔にし、温度湿度を一定に保つ。侵害的な外的刺激から守り、予測不可能なものを近づかせない。これら人工的に創り出された快適な環境は、子宮内環境の再現であり、実際に母親の腕に抱かれていた時の心地よい空間の再現である。ウィニコットはこれを、パレントをひきながら、「空気中の酸素」[Winnicott 1965a:86=1977:97]になぞらえて述べている。乳児はそれについて何も知らない。しかし、それなしには生存そのものが不可能であるような、存在の土台を支える環境的供給は確かに在り、それは「抱えること(holding)」という語で象徴的に表現される。

母親の役割の第二の側面は、「あやすこと(handling)」⁶⁾である。これは、乳児に身体的接触や強すぎることをない外的刺激を与えることによって、感覚的で動的な出来事を体験させることを表現している。歌を歌ったり、やさしく揺すぶったり、視覚的器具をもって気をひいたり、ということも含まれるだろう。「あやすこと」は乳児に何らかの体験をさせるという意味で、乳児に身体的刺激を与える側面を表しているのである。三つめの側面は、「対象を提示すること(object-presenting)」である。最早期の乳児は、すべてを思いのままに創り出したり破壊したりしうる全能の世界に住んでいるのであるが、その世界の成立を可能にするのは母親が乳児の望んだそのとき、あるいは乳児自身が欲求に気づく前に現実の対象を差し出す場合に限られる。このようなかたちで、母親は乳児の全能的世界の成立を支持している。

母親のはたらきかけ(mothering)におけるこの三つの側面は、しかしそれぞれが厳密に区分されるものではない。母親の、乳児に対する具体的なひとつの関わりが、これらすべての特徴をもつこともありうるということには十分に留意しなければならないだろう。ウィニコットは次のように述べている。「これ(holding)は、子宮内の生活で身体的に抱えること(the physical hold

ing)にはじまり、しだいに、あやすこと(handling)も含めた、乳児の適切な世話全体を意味するところまで拡大される」[Winnicott 1986:27=1999:15]。結局「抱えること」とは、「あやすこと」や「対象を提示すること」をも含めた、マザリングの全体を意味することになるのである。このようなはたらきかけを請け負う母親は、「環境としての母親(environmental mother)」と呼ばれる。この母親は、空気であり、食物であり、心地よい環境そのものであるが、乳児と異なる個体としてはまだ認識されていない。つまり、乳児はまだ、ひとりの人間としての母親、「他者」としての母親に気づいていないのである。

さて、このマザリングは、乳児の自我(ego)を補強する役割を担うものとされている。これを具体的に理解するために、まずは、ウィニコットが自我をいかなるものとして想定していたのか、そこに立ち返る必要があるだろう。

B. 自我の原初的形態 —身体自我(body-ego)—

ウィニコットは、既に自明のものとしているのか、自我がはたしてなにを指し示すものであるのかについて、丁寧な概念規定をしていない。例えば、以下のような記述がある。

「自我は身体自我(body-ego)に基盤をもつ。」[Winnicott 1965a:59=1977:62]。

この「身体自我」という概念はそもそもフロイトによって提唱されたものであるが⁷⁾、フロイト自身はこれを充分には展開しなかった。これを《皮膚-自我》として新たに自我の原初的形態について詳細に考察したのが、フランスの分析家、D.アンジューである。彼はフロイトの「身体自我」に依拠し、「身体的「自我」と心的「自我」との空間的な構成に関連して、心的装置についての局所的な視点を補完する」[Anzieu 1985=1993:24]のために《皮膚-自我(Le Moi-peau)》という概念を導入する。ウィニコットにおける「身体自我」概念解明の手がかりとするため、以下しばらく、アンジューの《皮膚-自我》の概念を追うことにしよう。

《皮膚-自我》の前提は心的なあらゆる活動は生物学的な機能にその基礎を置くというテーゼである。そもそも触覚にはじまる諸感覚が自我のはじまりであると考えられている。「《皮膚-自我》という概念で私が示そうとするのは、発達の初期段階にある子どもが身体表面の経験に基づいて自分自身を心的な内容を含む「自我」として表現するのに用いる形象である。」[ibid. 69]。したがって、自我の機能を明らかにするために、

皮膚の三つの機能についてまず詳述される。その第一は、哺乳や世話、話しかけなどのもたらす充足感を内部に収めておくための袋。第二は、外部と内部の境界を設定し、外部を外側に保っておくための境界面。他者に由来する攻撃や渴望の侵入を防ぐ障壁となる。第三は、他者との関係を樹立するための基本的手段であり場所。他者によって残された痕跡を刻み込んでおく表面である。自我の起源は皮膚に求められるため、皮膚の機能は精神的に内化され、そのまま自我の機能として重なり合うこととなる。すなわち、自我は(心的な防衛機制として)障壁を設置することと、膜を通して(エス、超自我、外界と)交換をすることの二重の機能を負うことになる。

ここはフロイトが言及しなかった点であるが、アンジューはさらに、このような《皮膚-自我》は母親のはたらきかけによって発達するものであると考えた。乳児はお乳を吸い、母親の腕に抱かれ、運ばれ、いじられ、こすられ、あらわれ、愛撫される。これらすべてには通常話し掛けや鼻歌が伴う。これらを体験することにより、子どもは「外と内とを区別する界面と、さらにその中に自分が浸っているように感じられるひとつの三次元的広がり」[ibid.64]を感じるようになる。皮膚表面での接触は、その瞬間においてひとつの特別な形を創りだす。それが何度も繰り返されることによって、その形は乳児の身体の形状となっていくのである。この表面と三次元的な広がりを経験することが、子どもに容器としてのイメージを与え、自分と自分でないものとの気づきを促進し、そして自分を「内側」に、自分でないものを「外側」へと位置させるような空間感覚を発達させるのだ。

アンジューは、自分のこのアイデアが、ウィニコットにおける母親の「抱えること」についての一連の議論に着想を得ているということを確認に述べている[ibid.55,162]。そもそもこの《皮膚-自我》という概念そのものが、当時フランスで主流だった構造主義的動向と、英米で活発だった発達心理学的動向との断絶を埋めるものとして構想されたものなのである。この構想が成功しているかどうかを本論文で分析することはできないが、ここではアンジューの仕事をそのまま評価し、彼の《皮膚-自我》という概念を、フロイトの自我観とウィニコットの自我観をつなぐものとして位置付けたい。

さて、ウィニコットの議論に戻ろう。

「自我は身体自我(body-ego)に基盤をもつ。」[Winnicott 1965a:59 = 1977:62]。

フロイトをそのまま引いてきたかのようなこのウィニコットの記述が、アンジューの《皮膚-自我》、つまり彼の解釈したフロイトの「身体自我」と重なるものとして考えることに対しては、もはや異論はないだろう。自他未分離の世界における原初的体験は、乳児の全能的世界を支持するものでないかぎりにおいて、侵害あるいは外傷となってしまう可能性がある。自他の区がないということは、つまり両者を分離する境界がまだ確立していないということだからであり、自分を保護する膜がまだできていないということからである。そこにおいて乳児は、いわば剥き出しで傷つきやすい、生の存在として外界にさらされている。そこで母親が、乳児の境界膜としての未熟な自我を補強し、むき出しの乳児を保護しなければならないのである。

母親が子どもの自我を強化するとはいかなることか、今や以下のように理解ができるであろう。自我は、皮膚という身体の表面における体験を基盤に発達する。それは、フロイトが述べたような十全にはたらく機能的自我にいずれはなることができるが、その発達には母親の乳児に対するはたらきかけ(mothering)にかかっている。母親は、乳児の環境をさまざまな形で整え、快適な状態を保つ(holding)。また、身体的刺激や侵害的でない体験を与えることによって、身体表面の感覚、そしてその中に自分が存在しているという感覚を発達させる(handling)。さらに、乳児が必要とし望むものを、適切なとき適切な方法で提示することで、乳児の全能的世界を保障する(object-presenting)。この「環境としての母親」の機能は、乳児を外的な侵襲から守る保護膜として機能する。これは、子宮内世界の再現であり、象徴でもある。つまり、最早期の乳児は、まだ自分の皮膚を外界との境界として体験できない。その意味で、内と外との境界膜としての自我は未熟で頼りないものである。だから母親は、乳児の外側にもうひとつ保護膜を創り、その中に「抱える」ことによって、乳児の自我を強化、補強するのである。アンジューの言葉でいえば、人間にとっては「母の皮膚が最初の皮膚」[Anziew 1985 = 1993:26]なのである。

自他未分離の全能的世界で身体的情緒的体験を重ね、時間的空間的連続性と感覚的表面というものを経験し、さまざまな体験を保持することができるようになってくると、表面と容器としての体験が、「自分(Me)」と「自分でないもの(Not-me)」との区別の気づきを促進し、内側と外側という空間感覚を発達させる。そして、「好適な環境においては、皮膚(skin)は「自分(me)」と

「自分でないもの(not-me)」との間の境界となる」[Winnicott 1965a:61=1977:65]のである。同時に、母親は乳児への適応の度合いを減らすこと、つまり乳児を包み込んでいる保護膜の強度を徐々に下げていくことによって、自分の思い通りにならない世界、外的対象世界への気づきをさらに促進するように導いていく。これによってもまた、乳児自身の境界膜としての自我の発達が促されるのである。

C. 境界膜としての自我 —自他の出会う場所—

さて、このようにして乳児の自我は次第に強さをましてくる。すると、他者との障壁となるほかに、他者との関係を可能にするという、自我のもうひとつの機能がはたらくようになる。「自分でないもの」への気づき、「自分とは異なる存在」に気づくことができはじめて、二者間の関係が可能になるのである。「自分」しか存在しない全能的世界は、ある意味、孤独な世界であった。そこは「自分」以外の誰もいないか、あるいは「自分」さえも存在し得ない、自己愛的な世界であった。「自分でない」もの、他者の存在は、「自分」を脅かすと同時に限りない豊かさの源泉でもあるのだ。

他者との障壁となる、ということと、他者との関係を可能にする、という自我のもつふたつの機能は、おそらく同一事態の異なる側面である。アンジューによれば、皮膚という境界膜はそもそも伸縮性に富み、穴だらけでひだや空洞までももつものである。数限りない体孔、代謝による排泄と取り入れを同時に行う細胞たちによって構成されるこの境界膜は、内と外とを断つものでありながら、内と外とをつなぐ唯一のものでもある。したがって自我という境界膜は、内部でありながら外部である、同時にどちらでもないという逆説と考えられるのである。ここでは自我は、けして個体内深くに沈潜するものとしてイメージされてはいない。自我とは、心的な意味でも身体的な意味でも、「自分」を他者と切り離す障壁でありながら、「自分」と他者との関係を可能にするような「界面」なのである。この逆説は、人がひとりの個人として外的なものからどこまでも独立してゆこうという傾向をもちながら、完全な独立、内と外との完全な分離はけしてありえないのだという、ウィニコットが繰り返すテーゼに収斂していくことになる。

前述したように、ウィニコットにおける自他関係論は、そもそも「自他関係」自体が可能になるその成立基盤を語ることから出発していた。小論は、この「対象

関係＝自他関係」の成立基盤を、「自我(ego)」の確立という観点から粗描したものである。この議論の過程で、出生と同時に無条件に与えられ、活発な防衛機制をはたかせながら即座に対象関係を開始するようなクライイン的「自我」と、ウィニコットが考える「自我」とのずれが浮き彫りになった。ウィニコットにおいて「自我」は、身体に由来し、そもそもは「他者＝母親」の支持があってはじめて、かよわく未熟な在りかたから徐々に自律的強度を備えたものとなるようなものである。その意味で、「自我」とは個人に無条件に与えられる自明なもの、個人に固有の「内的、私的、心的な」ものではけしてない。つまり、自他関係における「自」に相当するものを意味していないのである。それは、自らの身体的生物的成熟の過程と、それを全面的に保証する「他者」の援助とが濃密に作用しあうなかで形成される、「自」と「他」の狭間そのものである。言い換えれば、「自」であると同時に「他」、あるいはそのどちらでもないという逆説的な「界面」であり、「自他関係」成立を可能にする前提条件なのだ。「自」と「他」とを分かち障壁でありながらも、両者が出会う唯一の場であるという逆説、それがウィニコットの述べる「自我」の意味するところであった。このような「自我」観は、そもそもフロイトに端を発するとはいえ、精神分析の世界においても一般的に了解されているものではけしてない。しかし、自他の狭間というこの「自我」概念が、精神分析に限らず広く自他関係を考える際のひとつの魅力的な手がかりとなることは、間違いないのではなからうか。

Ⅲ H.コフートにおける自他関係観

—「ナルシズム」の観点から—

野見 収

本章では、精神分析学思想における「ナルシズム」論とそれに伴う自他関係観の展開を見据えながら、精神分析学的自己心理学の創始者、H.コフートの「ナルシズム」論に焦点を当てること、本稿の課題——精神分析学における自他関係論の描出——へとアプローチしてみたい。

A. フロイトにおける「ナルシズム」論とその自他関係観

精神分析学の祖たるS.フロイトにおいて「ナルシズム」は、「一次ナルシズム(primärer Narzissmus)」、「二次ナルシズム(sekundärer Narzissmus)」という二つの概念を持って論じられていた。1914年の著作『ナ

ルシズム入門)を見る限り、その二つは、「自我(Ich)」にリビドーが備給されている状況を指すという点では共通しているが⁸⁾、発達論ないし病理論的見地においては明確に異なるものだとされている[Freud 1914 = 1970]。

フロイトによれば、通常、人生の初期段階においてリビドーは、「エス(Es)」で生産され(「自体愛(Autoerotismus)」)、「自我」に備給され、その後、外界の「対象(Objekt)」に備給される。この人生の初期段階において、「自我」にリビドー備給されている状態が「一次ナルシズム」であり、それは人生初期に必ず存在する正常な発達段階の一つである。しかし、「二次ナルシズム」は、このように一旦は外界の「対象」に備給されたリビドーが、正常な発達過程を逸脱する形で「対象」から撤回し、再び「自我」に再備給されるという病理的状态——「パラフレニー(Paraphrenie)」——を示すものだという。

ここで正常なものとして見なされている発達過程、すなわちリビドー備給の主体たる「自我」が、その備給先を自己から「対象」へと移行させる過程とは、「自我」がそのリビドー的関心を自己のみならず「対象」へと拡大することに他ならない。その意味で「一次ナルシズム」とは、未だ世界が自己への関心のみによって満たされた、発達の準備段階とも呼べるものであり、「二次ナルシズム」とはそうした「一次ナルシズム」への病理的退行なのだといえよう。だとすれば、フロイトにおいて人間発達とは、世界が自己だけで構成されている未熟な状態から、自己と「対象」とで構成されている成熟した状態へと移行する過程、すなわち自他分節への過程として見なされていたということになる。言うまでもなく、こうした発達観を導くのは、自他未分節に対し自他分節を優位なものとする思考に他ならない。そしてまたこうした思考を可能にするのは、自他未分節と自他分節という二つの事柄を二者択一的なものとするものの見方である。したがって、フロイトの「ナルシズム」論をその根底で支えるのは、まさにこの二者択一的な自他関係観だと言える。

B. 精神分析学におけるその後の展開

よく知られているように、精神分析学のその後の展開においては、フロイトの「ナルシズム」論に対していくつかの修正が試みられている。例えば、フロイトの末娘 A.フロイトにはじまる精神分析的自我心理学の中心人物、H.ハルトマンは、「ナルシズム」を「自我」への備給ではなく「自己(self)」への備給として

記述すべきだという主張を行なった[Hartmann 1950 = 1964:113ff.]。また、英国対象関係論の源泉たる M.クラインは、「部分対象(part objects)」という語をもって人生最初期における対象関係の存在を認め、「一次ナルシズム」の考えを棄却した[Klein 1935 = 1983:21ff.]。しかし、これらの主張は、フロイトの「ナルシズム」論に対する修正には成功しているものの、その根底にある自他関係観の修正に到るものではなかった。

ハルトマンにおける「自己」概念の追加は、確かにリビドー備給の主体と客体とを概念的に区別することによって、「ナルシズム」に対する新たな見方を提供した。しかし、議論はそこにとどまり、フロイトの自他関係観を修正するに到らなかった。また、クラインにおける「一次ナルシズム」の棄却は、人間発達を自他分節の下に一元化したという点において画期的であるものの、まさにその自他分節一元化の思考自体、未だフロイトにみる二者択一的な自他関係観に縛られており、これもまた本質的な修正とは言い難い。

だが、こうした自他関係観の趨勢は、H.コフートにおける新たな「ナルシズム」論の展開によって、その流れを変えられることになる。コフートは、自我心理学に出自をもちながら、後に理論転回をとげそれと決別し、新たに自己心理学という潮流を築いた米国の心理学者である。近年、次第にわが国においても邦訳が出版され、注目を集めつつあるが、すでに米国において精神分析学の主流はこの自己心理学にある。そして、しばしば紹介されるように、この自己心理学の根幹を支えるのが、その独特の「ナルシズム」論であり、まさにそれこそがコフートを自我心理学から決別せしめたものであった。その意味で、このコフートの「ナルシズム」論に対する検討は不可避であろう。以下、その議論を見ていきたい。

C. コフートにおける「ナルシズム」論とその自他関係観

コフートは、1971年の著作の中で次のように述べている。

「私はいま一度強調したいのだが、私自身の観察は、別個のほとんど独立した二つの発達経路を想定するなら、実り多く、かつ経験的データとも一致する、という確信へと私を導いたのである。その一つの経路とは、自体愛から自己愛を経て対象愛へと至る道である。もう一つの経路は、自体愛から自己愛のより高度な私たちへと変形する道である。」[Kohut 1971:220 = 1994:198]。

すでに述べたように、フロイトに始まる精神分析理解においては、まず「一次ナルシズム」を経て、「対象愛(object love)」⁹⁾すなわち「対象備給」に移るという発達ラインが想定されていた。上に見るようにももちろんコフートもそれを否定しない。しかし、コフートは、フロイトのように「ナルシズム」を発達上のある一点を指し示すに過ぎないものとしてではなく、その「ナルシズム」それ自体にも発達があるとしたのである。

しかし、このように「ナルシズム」それ自体の発達とは言っても、それはリビドーで結ばれた外界との関係、すなわち「対象関係(object relationships)」を必要としない発達を意味するものではない。

コフートはある講義の中で次のように述べている。「ナルシズムの時の対象はどうなっているのでしょうか。ここに昔からの誤解があり、それを明確にすることは極めて重要です。すなわちナルシズムは対象関係(object relationships)と矛盾しないのです。」[Kohut 1987:10=1989:13]。

つまり、コフートは「ナルシズム」においても「対象関係」は存在すると主張しているのである。こうなると、コフートの「ナルシズム」という概念は、フロイトのそれとは異なった地平の下で、すなわち「自我」か「対象」か、自他未分節か分節かという二者択一的な地平とは異なるところで定式化されていると言わざるを得ない。

そこで1971年の著書を見ると次のような記述がある。「小さな子供は他の人々に対してナルシズム的備給を投資し、そうすることによって彼らをナルシズム的に、つまり自己対象として体験する。」[Kohut 1971:26=1994:24]。

これを見ると、コフートは「自己対象」なるものにリビドー備給が行われることを「ナルシズム」としているということがわかる。では「自己対象」とは何か。上の記述を見る限りでは、「他の人々」すなわち外界の「対象」に「ナルシズム的備給」を投資すること、それが「自己対象」として体験することだという。

コフートは同書で「自己対象」について次のような記述をおこなっている。

「自己対象とは、……それ自身、自己の一部として体験される(experienced as part of the self)対象である。」[ibid.iv]。

これによれば、コフートにおける「自己対象」とはひとまず「対象」だということができる。つまり、この概念が指し示すものは、リビドー経済論的にはあくまでもリビドー客体なのである。しかし、同時に「自己の

一部分として体験される」という記述から、体験的には自己として捉えられる性質を持つものとしても見えてくる。そして先に見たように、この自己として捉えられる体験すなわち「自己対象」の体験をコフートは「ナルシズム的備給」と呼ぶのである。したがって、ここで前者の位相を客観的位相として、後者の位相を主観的位相と呼ぶことが許されるなら、コフートにとって「ナルシズム」とは、客観的に何がリビドー客体になっているのかではなく、主観的にどのように愛を体験しているかをもって定義されるものだということになる。

こうしてコフートは「対象関係」と「ナルシズム」という二つの概念を矛盾なく同時定立させるとともに、「ナルシズム」、すなわち自己への愛という事柄の意味を従来の病的なもののみならず、正常なものも含めて拡大する。すでに見たようにコフートは、「ナルシズム」から「対象愛」へという従来どおりの発達ラインを否定しない。あくまでも人はその初期段階において自己を愛し、発達にともない「対象」を愛するようになる。しかし、この「対象」を愛する仕方は、人生初期と同じように、自己を愛するようになされるというのがコフート「ナルシズム」論の本質であり、強調点であった。

そしてこのことは、先に見た精神分析学における二者択一的な自他関係観を乗り越えることにつながる。コフートにおいて人間発達は客観的位相においては確かに自他未分節から分節へと向かうものとして捉えられている。しかし、主観的位相においては、いわば客観的位相における分節を下支えする形で、生涯を通じて自他未分節の状態に貫かれるものとして捉えられているのである。だとするならば、ここに前提されているものは、自他未分節か自他分節かという二者択一的な自他関係観ではなくて、それら二つの同時成立という事態に拠ってたつ自他関係観だといえる。

D. コフート自他関係論の可能性

コフートは自らの「ナルシズム」観を簡潔かつ的確に次の一文で表現している。

「愛の対象が同時に自己対象でないような成熟した愛は存在しない、と主張することに私は躊躇しない。」[Kohut 1977:122=1995:96]。

上で整理したように、まさに、コフートにとって「対象」を愛するということは、「自己」を愛することなのである。しかしこのことは、他者への愛を否定するものでも、ましてや利己主義の唱導でもない。上のよ

うなコフォートの主張を支えているのは、とりもなおさず「自己対象」、すなわち主観的位相における自他未分節と、「対象」すなわち客観的位相における自他分節との双方向からの着眼にあるのであって、客観的位相における自他分節のみを前提にした上で「対象」への愛を否定するものではない。純粹な「対象」への愛というのは、主観的位相を加味せず、客観的位相の観点からのみ対象関係を見つめた時成り立つ。しかし、コフォートのように二つの位相を重ね合わせた観点からみつめると、「自己」への愛と「対象」への愛は同時に成り立つのである。したがって、コフォートが暗に主張しているのは、自分を愛することが他者を愛することにつながり、同時に他者を愛することが自分を愛することにつながるといふ論理であり、利己主義、利他主義という言葉で表現されるような、自他未分節か自他分節かという二者択一的思考に基づく自他関係図式を越えるものだと言えよう。この観点からすると、冒頭で示したフロイトないしそれ以後の展開に見られる、自他分節を優位とするもの見方は、それ自体、利他主義的であり、コフォートのそれとは根本的に異なることが改めてわかるだろう。

コフォートはある講義の中で、フロイトにみる利他主義的自他関係観にある偏見に基づくものだとし、そうした偏見が生じるのは、「我々が利他主義(altruism)を最高の美德だとするような文化、とりわけ西洋文化の中で生きてきた」[Kohut 1987:9=1989:11]ためだとした。また1978年の論文の中では、それを西洋文化において支配的なユダヤ教、キリスト教倫理の表れだと断じている[Kohut 1978:322=1991:248]。

確かに人間諸理論は、その文化的、宗教的、歴史的背景によって様々に彩られ、その都度、姿を変えていく。利他主義的倫理観の下では利他主義的理論が、利己主義的倫理観の下では利己主義的理論が生み出されることになろう。コフォートはこうした問題把握の上で、フロイトを批判し、それを乗り越えようとしたのである。

しかしだからといって、コフォートの自他関係観が批判から自由であるかというところではない。相対的なもの見方は常に自らの議論をも相対化していく危険性を孕んでいる。すなわちコフォートは、自らがフロイトを批判したのと全く同じ仕方でも批判されるのである——その自他関係観は偏見に基づくものであると。

いかなる自他関係観も、こうして繰り返されていく偏見の誇りから逃れることは難しい。にもかかわらずなお、自他関係論の可能性を求めるならば、それは、

それぞれに背景の異なる自他関係観を整理しながら、現代社会における問題状況と課題を広い視野から見極め、その妥当性を検討していくことに求められよう。

こうした課題意識の導出、まさにこのことこそが、精神分析学における「ナルシズム」論の展開を追いながらその自他関係観の推移を見てきた本章の、わずかばかりの成果であると信じたい。

Ⅳ 私と他なるものの“そもそものはじまり”とそれを“いまここ”で振り返ること

—フロイトの発生論が内包する“ねじれ”について—

秋山 茂幸

〈自他〉論という問題系を思考するとき精神分析に特有であるのは、それらが“そもそものはじまり”においてどういう様相にあり、その後〈自〉と〈他〉がどのように構造化されてくるのかというプロセスに関心があるということだろう。したがって、精神分析では自と他なるものが、“そもそものはじまり”から統合された個として自立的に存在し両者がその上で関係を持つというようには考えないし、さらにプロセスを辿る見方は、そのプロセス自体が“いまここ”の〈自他関係〉に内包されつつ(内臓庫を無意識と呼んでいるのだろう)、両者の関係性において立ち現れてくるという把握を合わせ持っている。

小論では、“そもそものはじまり(始源)”，そしてそれが構造化されてくるプロセスについて、精神分析の“そもそものはじまり”であるS.フロイト¹⁰⁾に焦点をあてて論じる。自らの探究を考古学に準えることを好んだフロイトの視線は、つねに人間や生命そして世界の始源へと向かっている¹¹⁾。ここでは、始源へと向かう力として措定されている「欲動(Trieb)」概念に着目しつつ、自我とエス(“私”と私にとって他なるものとしての“それ”)の関係について考察する。というのも、それによって〈自〉と〈他〉をはじめとしてフロイトが腑分けする様々な〈二つのもの〉が、始源の〈一つのもの〉¹²⁾といかなる関係にあるのかについて見通しを得ることができるからである。自他問題を論じるにあたり、小論では外なる他者と自己の関係ではなく、内なる他性と「自我=私」の関係の問題を扱う。これは一見、的外れに見えるかもしれないが、内において私ならざるものを排除しつつ私が立ち上がってくること(内主体的差異)と、外部の他者の立ち上がりと同時に私が立ち上がってくること(間主体的差異)は、即応

した過程である¹³⁾。

ここでの主要な課題は、この過程の論理構造を追うこと、そして“そもそものはじまり”である<一つのもの>が<二つのもの>へと二極化するプロセスを、“いまここ”で遡及的に振り返るといふ所作に内包されている理論的な“ねじれ”を浮き上がらせることにある。すなわち、それは<自他関係>論のメタ理論的、論理構造的な問題を考察することであるといえよう。

A. 深層＝始源における無分節

— “そもそものはじまり”における<一つのもの>—

まず、人間という存在を何よりも<二つのもの>の間で対立葛藤するものとして捉えていたフロイトが、人間の深層＝始源において、あらゆる二元論の無分節態を想定していたことをみておきたい。とはいったものの、フロイトは、それについて明示的に述べてはいない。しかし、夢そして「原始言語(Urwort)」に関するフロイトの考察を検討することで、対立の深層＝始源における無分節の想定というテーゼをアナログカルに跡付けすることが可能である。そこで提示される結論は、フロイトの徹底した二元論が分節消去と分節生成という運動全体の一側面の現れを示しているということである。そして最後に、フロイトが分節化された生についてどのように捉えていたかについて見ていくことになる。そこで、「欲動(Trieb)」の性格を概観することから始めたい。

まず、「欲動(Trieb)」の性格の一つはその深層性にあると言えるが、「心的なもの」と身体的なものとの境界概念[Freud 1915a:214=1970:63]とされる「欲動(Trieb)」は、心身二元論を超える地平を開くものである。すなわち、心の深層において身体が発見される。したがって、エスは「身体的な過去」[Freud 1940:138=1983:209]をあらわすのだとフロイトはいう。「過去」とは、時間的な始源(への退行)を意味しており、「そもそものはじまり」では、すべてのものがエスであった(Ursprünglich war ja alles Es)[Freud 1940:85=1983:172]とされる。第二局所論においては、エスこそが「本来の心的なもの」[Freud 1926b:223=1984:171]であり、「われわれの存在の中核」[Freud 1940:128=1983:201]であるとされ、自我も超自我もエスから生まれてくると考えられている¹⁴⁾。一方、第一局所論では、無意識にその座が与えられていた。「[無意識]の内容は、心理的な意味での原住民(Urbevölkerung)に比較することができる」[Freud 1915b:294=1970:107]などとさ

れる。

こうしたことから、次のように言うことができる。フロイトにおいて、<自我→エス>(第一局所論においては<意識→無意識>)と心の深層へと達することは、時間的に始源へと退行することと同義なのである¹⁵⁾。

そこで、「欲動(Trieb)」に関して抽出できる一つの本質的な性質を提示すれば、「欲動(Trieb)」とは、二分法的な概念の分節化以前に、深層＝始源における未分化なものとして存在する(もしくは遡ろうとする)ものであるということになる。

すなわち、フロイトが措定した<心—身体>、<大人—子ども>、<文明—未開>、<現実—夢>、<生—死>、<健康人—病者>、<人間—動物>、<二次過程—一次過程>、<現実原則—快感原則>などといった様々な二分法に対して、「欲動(Trieb)」はその距離を縮めるために深層＝始源の無分節態へと遡る。

左項から右項へのプロセスとは、心の深層へと向かうことであり、時間的に退行することを意味する。そして、右項を始源として捉え、それらが外部からの影響を受けることによって、左項が生まれ二つに分節化されたと考えるのである。そしてこれらの分節化の元に、エスからの自我の(もしくは無意識からの意識の)分化があるといってよい。フロイトが心的生の本質を二元論的な葛藤と捉えたのは、自我が生まれてしまったからこそなのである。深層＝始源においてはそのような葛藤は存在せず、あらゆるものが未分節なものとして存在する。したがって、「エスの内部ではなんらの衝突もない」[Freud 1926b:223=1984:172]。また、フロイトは無意識の性格に、「矛盾のないこと」[Freud 1915b:286=1970:102]を挙げている。無意識とは「非論理の王国」であり、「相対立する目的を持ったさまざまの傾向が、調整の要求を生ずることもなく無意識の中に並存し合っている」[Freud 1940:91=1983:176]。そこでは、対立するものは同一のもののように扱われ、いかなる組織性も存在しない。

このような深層＝始源における無分節態という思想は、フロイトが夢の表現手段を考察して、「対立しているもの同士は、一つに纏められる、ないしは一つのものとして表現される」[Freud 1900:323=1968:265]と述べたことに通じている。夢においては、場面や関係の「転倒(Umkehrung)」があらわれ、主客、因果、意味などが反転し、対立するものによって代用される。そして、夢において比喩をその本質とする「象徴関係は古代に言語が同一だったことの名残り」であるとさ

れる[Freud 1916-:170=1971:137]¹⁶⁾。

さらにフロイトは、「原始言語における単語の意味の相反性について」(1910)において、この夢の作業の方法が古い諸言語の特質とびったり一致すると指摘している。この小論は、言語学者 K.アーベルの論文からの多量な引用によって構成されている奇異なものだが、フロイトが「分節する(artikulieren: 明瞭に発音する, 明確に言葉にする)」という作用以前の始源のものとして、無分節態としての無意識の過程を想定していたことの重要な証人である。アーベルによれば、古代言語においては、「強い」と「弱い」であるとか「光」と「闇」といった、相互にちょうど正反対になる二つの意味を両方含みもった単語があるという¹⁷⁾。フロイトが引用している叙述をここでさらに重引させてもらおうと、「すべての概念はその反対概念の双子の片割れのようなもの」であって「<強さ>という概念を手に入れるためには、<弱さ>との比較が絶対に必要だったから、<強い>という意味の単語も、<弱い>という概念を想起することによって、初めて生まれたのであって、もともとこの後者をも同時に含んでいたのだ。本当を言うと、<強い>という単語は、<強い>でもなければ<弱い>でもなく、この両概念の関係および区別を意味していたのであり、両概念にとっては、この区別こそ等しく生みの親だったのである……」[Freud 1910: 217f. = 1983:203]。

アーベルが挙げている大量の実例を紹介した末に、フロイトがこの小論で最終的に主張したかったのは、「夢のなかでの思考表現は退行的・原初的性格を帯びているとするわれわれの見解はその正しさが証明されたと考えてよい」[ibid.206f.]ということであった。すなわち、それは深層=始源と換言しうるが、その等号を媒介するのが無分節の地平である。そして、ここにフロイトがあらゆる心的事象を葛藤、対立、二元論として捉えたことの背景に潜む意味が垣間見えてくる。先に挙げた、いくつもの二分法は、発生論的には両者は未分化であって、一方が一方にとっての「双子の片割れのようなもの」なのであり、相対的な関係、区別こそが両者の本質なのである。分節化という事態そのものが、二元論の意味なのであって、一方が存在しなければ、もう一方も存在しない。逆に言えば、分節化された時点で、それらは相対的な対立もしくは相互排除の関係を意味している。そして、そのプロトタイプとなるのが、エスからの自我の分化なのである。

B. 強迫的かつ神経症的な回帰願望

— “いまここ” で振り返ることの “ねじれ” —

しかし、ここで注目すべきは、そもそも「エス(Es)」という「非人称代名詞は、この心的領域の主要性格、すなわちこの心的領域の自我異他性(Ichfremdheit)」[Freud 1933:79=1971:446]を表わしているというフロイトの指摘である。すなわち「それ=エス(Es)」とは「私=自我(Ich)」とは異なった他なるものであるという前提においてのみ立ち現れ、名づけられるものなのである。そうである以上、対立するものとしての「私=自我(Ich)」が存在しなければ「それ=エス(Es)」も存在しないということになる。分節化されない以上、自我もエスもないのだ。ここにフロイトが提示する議論に、ある種の “ねじれ” があることがわかる。

フロイトが「私=自我(Ich)」の発生論において「そもそものはじめ、すべてのものがエスであった」というとき、そのエスとは分節化されたときに自我との異他性において名指されたエスとは異なるものであり、それは分節化以前のいわば<原—エス>とでも呼ばなければならないものである。同様に、心身分節化以前の<原—身体>、文明の視線からみた未だ開かれてないという意味の未開とは異なる<原—未開>、人間の視線によって自らと分節化された動物とは異なる<原—動物>、生と死の分節化以前の地平としての<原—死>なども想定可能である¹⁸⁾。

しかし、フロイトは「私=自我(Ich)」にとって「他なる(fremd)」ものだとして「それ=エス(Es)」というとき¹⁹⁾、つねにすでに自と他の区別を前提としている。すなわち「欲動(Trieb)」においてあらゆる対立を飲み込んでゆく生命の流れ、エネルギーを予感し、心の深層への旅、時間的退行に<原—エス>を垣間見たとしても、それは分節化がすでになされてしまい事後的に発見されたエス、すなわち他なるものとしてのエスではないのである²⁰⁾。

フロイトは無意識について、それ自体では「存在することもできない」[Freud 1915b:286=1970:102]という。それは、無意識=深層=始源における無分節の生を生きる(生に還る)ことはできないということであり、また「欲動(Trieb)」から疎外され、その要求のままに生きることができないことを意味している。「欲動(Trieb)」は自我の防衛によって、様々な運命を辿り、それが完全に解放されることは決してありえない²¹⁾。そして、解放されず代償満足の道を歩む「欲動(Trieb)」は、代償である以上、十全な満足を知らず、繰り返し襲って来る。「それはもはや「欲動(Trieb)」の満足とも

うけとれない。この代償を遂行しても、何の快感もわからず、そのかわりに、代償の遂行が強迫的な性質をもってくる」[Freud 1926a:122=1970:326]。それは人が、「生の欲動(Lebenstrieb:生きることへの駆り立て)」や「死の欲動(Todestrieb:死ぬことへの駆り立て)」に憧れ続けるしかない存在だということだ。従って、深層=始源からの呼び声である「欲動(Trieb)」は、人を常にナマの有機体(<原一身体>)、生と死そのもの(<原一死>)へと駆り立てるが、人がそこに反復強迫的に到達しようとする努力は、倒錯的、神経症的にならざるをえない。我々は分節化された生を生きるしかない、自我から逃れることはできない、逆に言えばそれが人間たる所以なのだ、そうフロイトは言っているように思われる。

C. 終わりに

以上、これまで述べてきたことの骨子をまとめておこう。まず、フロイトは様々な<二つのもの>の彼方、“そもそものはじまり”に<一つのもの>を見ていた。その創生を“いまここ”で私が振り返るとき、<一つのもの>そのものは純粹には見えてこない。それは“いまここ”の私とは異なった他なるものであるという眼差しにおいて名づけられた何ものかではない。私は何ものかから生まれてきたが、それは私にとっては他なるものでしかありえない。振り返る者が、つねにすでに立ち上がってしまっている私という存在ではない以上、それは必然である。

しかし、最後にもう一步進めてみたい。<一つのもの>を想定し、そこに回帰するということ、ある種の(ロマン主義的な)甘美な幻想の物語だと捉え、それを事後的な構成の産物であるとするような解釈に全て還元することは、果たして妥当だろうか。それは振り返り語る者としての私の存在、同一性を、自明視し棚上げすることではじめて成り立つ解釈ではないのか。結局、私の自明性を突き崩すものについて私自身が振り返り語るという矛盾、“ねじれ”に忍耐強く付き合い続けるということこそが求められるのだろう²²⁾。

おわりに

須川 公央, 波多野 名奈

近代的な思考枠組みのなかで語られる自他関係は、極めて大雑把に捉えらるゝとするならば、人間主体が<他>なる自然をいかに支配し征服するか、という問

題として長い間問われ続けてきたといえよう。そして近代においては、そうした<他>なる自然を支配すべく、強固な自我を確立することが目指されたことも事実である。

今回、本稿で取り上げた精神分析学の祖フロイトを、そうした近代的自我の確立を唱える近代合理主義の完成者とみるか、はたまたポスト近代の嚆矢としてみるかは解釈が分かれる所であろう。フロイトの合理主義者としての側面を引き継いだ自我心理学においては、その目的は自我の確立へと向けられることになった。それは、我々にも馴染みの深い「発達 ~」と名を変えながらも教育言説の中に徐々に浸潤してゆき、あたかもそれが普遍的な原理を体現しているかの如く、規範的な言説として人口に膾炙されていったのはもはや周知の通りである。

一方でフロイトにおいて、それまで自明視された主体性への懐疑と人間理性の限界とが、はじめて先鋭にその姿を顕にしたということもまた事実である。デカルトの主観性の哲学に始まる意識する「わたし」への懐疑。本論においてそれは、「内なる他性」としての「無意識」、「エス」、「欲動」といった非人称的な衝動によって揺さぶりをかけられることになった。

さて、本稿で取り上げたフロイト以後の論者たちは、それぞれ独自の地平において自らの理論を打ち立てながらも、こうしたフロイトの反近代的な側面を継承しつつ、自他関係論一般に新たな理論的視座を提供したという点で共通する。クライン(とその読解者としてのラカン)においては<自>と<他>の相互補完性が問題にされ、その継承者たるウィニコットに至っては<自>と<他>が未だ分化していない自我未分の状態を想定することが、従来の近代的な<自>の固有性と自明性とを突き崩す可能性があるとする。さらにコフートにあっては、自他未分節か自他分節かという二者択一的な思考それ自体が極めて特殊近代的であると断じ、その止揚を試みようとする。

本稿においては、以上のように、自他論をめぐるフロイトの遺産の継承とそれとの対決の軌跡が浮き彫りになっているが、そこにおいて現れる様々な問題は、精神分析の世界のみならず広く自他関係一般を論じる際に必然的に生じる理論的困難の縮図として読むことができるだろう。本稿は、まさにそうした理論的困難の一端を垣間見たという点において、当初の課題を果たしたと言えるに違いない。

(指導教官 西平直助教授)

註

- 1) 無論, これはクラインの言う「取り入れ同一視 (introjective identification)」と併せて行使されることを必要とする。
- 2) 妄想-分裂の態勢から抑うつ態勢へと移行するにあたって, マザリングは必要不可欠な重要な契機である。クラインによって提起された乳児に対する母親の能動的働きかけの重要性は, クライン以後, ウィニコットの「抱えること (holding)」, ビオンの「もの想い (reverie)」といった概念に結実し, 理論的に深化されていくことになる。
- 3) J=M.パルミエが「M.クラインの悪い内的対象——分析の働きによってその投影が行われる——は, ラカンが攻撃性という格好な現象を通じて研究した, 寸断された身体のイマゴーに対応する」[Palmier 1970=1993:38]と述べるように, クライン理論とラカンのそれとでは, 理論的に多くの共通点があるということは良く知られているところである。無論, ラカン自らも, 自身の鏡像段階論を構築するにあたって, クラインの抑うつ態勢の議論に多大なる理論的示唆を受けたことを告白している [Lacan 1966=1977:28f.]。さらに, ここではこの抑うつ態勢と鏡像段階とが, その発生時期をほぼ同じくするという点も併せて銘記しておきたい。
- 4) 因みに, メルロ=ポンティは, 同一対象に対する両価性を自身の問題として引き受けられる心的状態を「両義性 (ambiguité)」と呼ぶ。
- 5) M.クラインが対象関係論の祖とされるのは, 彼女が個人の主観的幻想のなかでの「内的」対象群との関係を明らかにし, その点においてその後の精神分析の流れに決定的な影響を与えたからである。しかしながらクラインにおいては, 外的実在的な対象が個人の精神世界に与える影響については, ほとんど考慮に入れられなかった。つまりクラインにおける対象関係論は, 徹頭徹尾「内的」対象との関係に尽きるのであって, すべては心的世界における出来事として説明する唯心論的な理論構成になっているのである。しかし, クライン以後の英国対象関係論の理論家たち——特に, ウィニコットをその代表のひとりとする英国独立学派と呼ばれるグループ——は, このクラインの主観的幻想世界への偏りを修正し, 外的客観的な対象との関係を理論体系に組み込みなおした。
- 6) handling あるいは handle という語に, 日本語の「あやす=幼児が機嫌を良くするようになだめる」という意味はない。原義は「手で触れること」[小西 1988:821]である。しかし母親からのほたらかかけについて具体的なイメージを喚起するという点で, 妥当な訳であると考えてよいだろう。
- 7) 「自我はなによりもまず身体自我 (körperliches Ich) であり, ただ表面的存在であるだけでなく, その表面の投射されたものでさえある。」[Freud 1923=1970:274.]。「自我は究極的には身体感覚の, 主として身体の表面に由来するものから導き出される。つまりそれは, すでに我々が考察してきたように身体の表面の精神への投射, あるいは精神装置の表面と見なすことができよう。」[ibid.275]。
- 8) しかし, フロイトの著作全般を見渡すと, この「一次ナルシズム」という概念は, それが何に備給された状態なのか今ひとつはっきりしないというのもまた事実である。確かにフロイトは, 1914年の段階において, 「一次ナルシズム」を「自我」にリビドーが備給された状況として定義していることは間違いない。しかし, それは後に覆される。具体的には, そこでフロイトは「一次ナルシズム」を子宮内生活に原型を持つものとして, すなわち「自我」形成以前におこるものとしてしまったのである [Freud 1916=1971:342f.]。実際, ラプランシュ&ポンタリスも, この「一次ナルシズム」概念については現在でも意見の混乱があり, 一次ナルシズムが何に備給された状態なのか不明であるとしている [Laplanche/Pontalis 1967=1977:17ff.]。本章は, こうした背景を自覚した上で, 先にあげた1914年における定義に従い, 「一次ナルシズム」を「自我」にリビドーが備給された状況としてひとまず把握する。
- 9) コフォートが「対象愛 (object love)」というとき, それは「ナルシズム」の逆概念を示している。それは次の文章にも明確に表れている。「対象愛 (object love) の正反対は, ナルシズムであります。それは自己への愛 (the love of the self) であり, 愛されるものに向けられるはずのもので自己備給のことです。」[Kohut 1987:10=1989:13]。
- 10) 以下の叙述に即して述べれば, フロイト以後のあらゆる精神分析はフロイトを始源としてそこから生まれてきたものだが, われわれはフロイトに立ち返るときに, それらの理論・実践を前提に逆にそれらを出発点として振り返るということになる。
- 11) フロイトが, “そもそものはじまり”に関心を抱き続けたことは, 彼の様々な用語が「原 (Ur)」を接頭語として用いられていることに象徴的に表れている。例えば, 「原光景 (Urszene)」や「原抑圧 (Urverdrängung)」など。本論の文脈においては, すべてのものの“そもそものはじまり”がエスだと述べるフロイトが用いる「起源の (ursprünglich)」という形容詞や, 無意識を喩えるのに使っている心の「原住民 (Urbewölkerung)」という言葉, さらに「原始言語 (Urwort)」などという用語がすべて一本の線で繋がっている。
- 12) <一つのもの>を本論では無分節と呼んでおく。深層意識における無分節態という思想については, 井筒俊彦の東洋思想の解釈に教えられるところが多かった [井筒 1983]。
- 13) 「内なる他性」と「外なる他者性」については以下で考察した。詳しくは拙稿を参照のこと [秋山 2002]。
- 14) 「自我は外界からの絶えざる影響によって, エスの中から発達してきたものである」[Freud 1940:85=1983:172]。また, 自我はエスの外皮, 表玄関など表現される。さらに「超自我はエスに起源がある」[Freud 1926a:145=1970:340]とされる。
- 15) 例えばフロイトは, 精神病の過程を「深層に達した (退行した) 心的生活の変化」と解釈し, 自我が「自らが以前の状態へ復帰すること (退行) を許すことによって, それがエスの後から成立したという事実を証明する」という [Freud 1940:97,88=1983:179,174]。
- 16) フロイトはここで, シュレーパー症例においてみられた, 神自身から語られた言葉としての「基本語 (Grundsprache)」の想起を促している。シュレーパーが記述する基本語原文の表現様式には, 愛から憎への反対転化などといった, 矛盾が存在するとされる。

- 17) アーベルは、主にエジプト語について考察しているようだが、印欧語およびセム族の諸言語にも同様の現象がみられるという。例えば、ラテン語における「altus(高い—低い)」、 「sacer(聖なる—瀆神の)」などが挙げられている。
- 18) 以上の記述は、やや唐突の観を呈しているかもしれない。例えば、生と死に関して簡略に述べておくと、フロイトは生命以後に訪れる死と生命以前の真空状態を同一のものとして捉えているが、誕生以前の真空状態を生と対立するものと捉えるのは、生者が生の視点から眺めているがゆえである。したがって、その目線の位置を生命以前(もしくは以後)に置くとするなら、生でも死でもない無分節の様態が想定できるはずである。
- 19) さらに「他なる(fremd)」という表現に関連して、「欲動(Trieb)」が「見知らぬ客(fremden Gäste)」や「異様な悪霊(böse, fremde Geister)」[Freud 1917:9=1983:329f.] と比喩されている。
- 20) ジャック・デリダの痕跡の思想が想起できよう[Derrida 1967=1970]。本稿の文脈に即していえば、根源としての無分節態の<原—エス>とは、つねにすでにひとつの痕跡であって、この痕跡から<原—エス>に遡行するしかなく、<原—エス>を純粹に取り出すことなど不可能であり、それは常に分節態としての自我によって侵蝕されているということになる。
- 21) 完全に解放された、いわば裸形の「欲動(Trieb)」とは、その時点ですでに「欲動(Trieb)」ではないともいえる。すなわち、それは完全に動物的な「本能(Instinkt)」である。
- 22) この点に関して執拗な考察を展開しているのが、ラカン—ジエクであろう。別稿で論じたい。
- (1923). 'Das Ich und das Es.' G. W. 13. (邦訳, 「自我とエス」著6)。
- (1926a(1925)). *Hemmung, Symptom und Angst*. G. W. 14. (邦訳, 『制止, 症状, 不安』著6)。
- (1926b). 'Die Frage der Laienanalyse.' G. W. 14. (邦訳, 「素人による精神分析の問題」著11)。
- (1933(1932)). *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. G. W. 15. (邦訳, 『精神分析入門(続)』著1)。
- (1940). 'Abriss der Psychoanalyse.' G. W. 17. (邦訳, 「精神分析学概説」著9)。
- Hartmann, H.(1964). 'Comments on the Psychoanalytic Theory of the Ego.' in *Essays on Ego Psychology*. New York: International Universities Press.
- 井筒俊彦(1983)『意識と本質』岩波書店, 1983年。
- Isaacs, S.(1948). S. アイザックス(松木邦裕ほか訳)『空想の性質と機能』『対象関係論の基礎: クライニアン・クラシックス』新曜社, 2003年。
- Kant, I.(1803). I.カント(尾渡達雄訳)『教育学』『カント全集16: 教育学・小論集・遺稿集』理想社, 1966年。
- Klein, M.(1921-1963). *The Writings of Melanie Klein*. 4 vols. London: Hogarth Press and The Institute of Psycho-Analysis, 1975. (=W. M. K. 1-4) (邦訳, 小此木啓吾ほか監修『メラニー・クライン著作集』全7巻, 誠信書房, 1983-1997)。
- (1933). 'The Early Development of Conscience in the Child.' W. M. K. 1. (邦訳, 「子どもにおける良心の早期発達」著3)。
- (1935). 'A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States.' W. M. K. 1. (邦訳, 「躁鬱状態の心因論に関する寄与」著3)。
- (1937). 'Love, Guilt and Reparation.' W. M. K. 1. (邦訳, 「愛, 罪そして償い」著3)。
- (1946). 'Notes on some Schizoid Mechanisms.' W. M. K. 3. (邦訳, 「分裂的機制についての覚書」著4)。
- Kohut, H.(1971). *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press. (邦訳, 水野信義・笠原嘉監訳『自己の分析』みすず書房, 1994年)。
- (1977). *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press. (邦訳, 本城秀次・笠原嘉監訳『自己の修復』みすず書房, 1995年)。
- (1978). 'Reflections on Advances in Self Psychology.' In *The Search for the Self*. Vol. 3., New York: International Universities Press. (邦訳, 岡秀樹訳『自己心理学の進歩』を読んで『自己心理学とその臨床—コフトとその後継者たち—』所収, 岩崎学術出版社, 1991年)。
- (1987(1974)). *The Kohut Seminars: On Self Psychology and Psychotherapy with Adolescents and Young Adult* (M. Elson, ed. by). New York: W. W. Norton. (邦訳, 伊藤洗監訳『コフト自己心理学セミナー1』金剛出版, 1989年)。
- 小西友七(1988)『ジーニアス英和辞典』大修館書店, 2001年。
- Lacan, J.(1949). J.ラカン(宮本忠雄ほか訳)「<わたし>の機能を形成するものとしての鏡像段階」『エクリ(I)』弘文堂, 1972年。
- (1958). J.ラカン(宮本忠雄ほか訳)「治療の指導とその能力の

引用文献

- 秋山茂幸(2002)「フロイトの<人間学>と<メタ人間学>: 「他性」としての Trieb 概念について」『研究室紀要』第28号, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室, 2002年。
- Anziew, D.(1985). 福田素子訳『皮膚—自我』言叢社, 1993年。
- Derrida, J.(1967). 高橋允昭訳『声と現象: フッサール現象学における記号の問題への序論』理想社, 1970年。
- Freud, S.(1877-1969). *Gesammelte Werke*. 18 vols. Frankfurt am Main: S. Fischer, 1964-1987. (=G. W. 1-17) (邦訳, 井村恒郎ほか編『フロイト著作集』全11巻, 人文書院, 1968-1984)。
- (1900). *Die Traumdeutung*. G. W. 2-3. (邦訳, 『夢判断』著2)。
- (1910). 'Über den Gegensinn der Urwort.' G. W. 8. 邦訳, 「原始言語における単語の意味の相反性について」著10)。
- (1914). 'Zur Einführung des Narzißmus.' G. W. 10. (邦訳, 「ナルシシズム入門」著5)。
- (1915a). 'Trieb und Tribschicksale.' G. W. 10. (邦訳, 「本能とその運命」著6)。
- (1915b). 'Das Unbewusste.' G. W. 10. (邦訳, 「無意識について」著6)。
- (1916-1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. G. W. 11. (邦訳, 『精神分析入門』著1)。
- (1917). 'A pszichoanalizis egy nehézségerol, (Eine Schwierigkeit der Psychoanalyse.)' G. W. 12. (邦訳, 「精神分析に関わるある困難」著10)。

- 諸原則』『エクリ(Ⅲ)』弘文堂, 1981年。
- (1966). J.ラカン(佐々木孝次ほか訳)「治療=型の異型について」『エクリ(Ⅱ)』弘文堂, 1977年。
- Laplanche, J and Pontalis, J.-B. (1967). J.ラプランシュ/J.-B. ポンタリス(村上仁監訳)『精神分析用語辞典』みすず書房, 1977年。
- Merleau-Ponty, M.(1950-). M.メルロ=ポンティ(木田元ほか訳)「幼児の対人関係」『幼児の対人関係』みすず書房, 2001年。
- 小此木啓吾(2002)『現代の精神分析：フロイトからフロイト以後へ』講談社学術文庫, 2002年。
- Palmier, J=M.(1970). J=M.パルミエ(岸田秀訳)『ラカン：象徴的なものと想像的なもの』青土社, 1993年。
- 新宮一成(1989)『無意識の病理学：クラインとラカン』金剛出版, 1989年。
- Winnicott, D. W.(1965a). *The Maturation Processes and the Facilitating Environment: Studies in the Theory of Emotional Development*. New York: International Universities Press. (邦訳, 牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社, 1977年)。
- (1965b). *The Family and Individual Development*. London: Routledge. (邦訳, 牛島定信監訳『子どもと家庭：その発達と病理』誠信書房, 1984年)。
- (1986). *Home Is Where We Start From: Essays by a Psychoanalyst*. Harmondsworth: Penguin Books. (邦訳, 井原成男他訳『ウイニコット著作集第3巻：家庭から社会へ』岩崎学術出版社, 1999年)。